

## ドビュッシーの作品

### チェロ・ソナタ

ドビュッシーは最晩年、6曲のソナタをまとめて出版するという構想を抱いていた。計画は彼の死により実現されなかったが、結果的に3曲のソナタが残された。このチェロ・ソナタはそのひとつで、1915年に書かれ、ソナタ集の第1曲になるはずだった。演奏時間10分前後の短い曲だが、洗練された楽想を有している。

### 第1狂詩曲

「管の国フランス」には、音楽院の課題曲(試験曲)として書かれた楽曲がある。コンパクトながら技巧的难度も高く、クラリネットの魅力を最大限に引き出せるものとして、クラリネット奏者の貴重なレパートリーとなっている。この狂詩曲は、1910年にパリ音楽院の課題用として書かれた。ドビュッシー自身も「最愛の作品」と言っており、オーケストラ伴奏版に編曲もしている。緩やかに夢見がちな詩情を歌うように始まり、官能的な音色のみならず、幅広い音域を用いて、息の長いフレーズと速いパッセージとを巧みに織り交ぜ、クラリネットという楽器の持つ様々な可能性を追求している。

### ヴァイオリン・ソナタ

ドビュッシーは最晩年に様々な楽器のための6つのソナタを構想したが、それらは結局、3曲しか完成しなかった。本作は死の前年、1917年の作で、ドビュッシーにとって生涯最後の作品となった。第一次世界大戦の最中、荒廃した世相と迫りくる自らの死に対峙しつつも、そこから解き放たれるように自由な旋律が紡がれていく。ふと香るスペインの調べが辞世の歌に気高さを添えている。

### メシアン: 世の終わりのための四重奏曲

本曲は、第二次世界大戦中の1940年、メシアンがゲルリッツの捕虜収容所に収容されていた時に書かれたことから、「世界」の終末を描いた悲劇的な作品と捉えられがちだが、タイトルの「世」は「時間」の意味に近い。敬虔なカトリック信者だったメシアンは、「ヨハネの黙示録 第10章」の「もはや時がない。第7の天使がラッパを吹くとき、神の秘められた計画が成就する」という箇所から靈感を得て、救世主の不滅と再来を賛美する、祈りに満ちた本作を作曲した。全体は8曲から構成されるが、これは「天地創造の7日間の後に永遠の平安が訪れる」という意図にもとづく。また、収容所内の限られた楽器奏者を想定した作品だったため、ヴァイオリン、チェロ、クラリネット、ピアノという珍しい編成を採用している。